令で、年最低時数の国定という形で復活するんです。小学校45分、中学校50分もここで明記されました。そこから10年後、1968年の省令からは、最低という言葉ではなく、標準という語に変わります。年標準時数を国が決めるけれども、標準という言葉なので、それを超えることもあるだろうし、それより少ないこともあるだろうという意味でした。

ところが、2003年の文科省通知で、この標準という言葉の解釈が実質的に変更になっています。これは、いわゆる「ゆとり教育」への批判に対応するような形で出された通知だったのですが、2つの変化を現場に引き起こしました。

1つは、授業時数の実績の管理が厳しくなったことです。

2つめは通知にある「標準を上回る適切な指導時間を確保」という言葉が一人歩きをして、この標準時数を下回ることがあっては絶対にいけないんだ、という解釈をされてしまったまま、今に至っていることです。

## 標準時数は変遷している<br>それは子どもに合っていたのか

次の4・5ページに、平日1日の標準時数の変遷を掲載しました。現状は、小6でも毎日が6時間授業になっています。それぞれの改訂時期の標準時数は子どもに合っていたかどうかを尋ねた、教員の方々へのアンケート結果の一部も掲載しています。

この調査では、自由記述欄を設けました。そこに寄せられたものをいくつかご紹介します。「低学年の5時間、高学年の6時間の多さが、子どもたちにゆとりをなくしていると感じます」、「6時間目は集中力もなく形だけの学習になる。児童の放課後の時間がほぼなくなった」、「教師1人当たりの授業時数も多いが、授業時間に収まりきれない内容も押し付けられてきたと感じている。それはずっと改善されておらず、教師の工夫に頼ってきた」。

兵庫県芦屋市で長く小学校教員をされてきた永田守さんはこんなふうに言っています。かつては、放課後に時間があり、充実した授業準備ができた。それは充実した授業につながり、子どもにとって楽しい授業になる。子どもが楽しい様子を見れば、教員はその仕事にやりがいを感じる。そういう好循環が当時の学校では成立していた、と。

## 「オーバー」している状態の見直し<br>子どもに合った時間数と内容を

今後どうしていけばいいかということを一言で申し上げると、民間の側から、小学校と中学校の時数ガイドラインを提案していってはどうかと考えています。以下は、私が案として考えている内容です。

まず、時数の過多の見直しとして、小学校については1日5時間、中学校については6時間は週2日とすること。

さらに、中学校の50分授業を45分にすること。

行事など授業以外の活動の重要性から、特別活動の時数は現在35時間のところを、70時間にすること。

また、時間割のわかりやすさの面から、教科・領域の時数は35の倍数にすること。

そして、これらの事柄の決定に、現場の教職員や子どもたちの意見がきちんと反映されること、などを考えています。

そして、この問題は、教育課程基準そのもののサイズが大きいということに加えて、学校現場でさらにそれを積み増ししている、という側面があります。先ほど説明した2003年の文科省通知、これを標準という言葉通りの解釈にしていくことがまず重要です。それから、これは大前提ですが、時数の削減に合わせて内容を減らしていく必要もありますし、時数を積み増ししないと学力が落ちるという圧力を避けるためには、全国学力調査を悉皆ではなく抽出にして、競い合いの緊張を取り除くことも必要です。

負担を減らしていく順番としては、まずは時数ではないかと思っています。教職員や子どもの1日の時間というのは有限なわけですよね。それに合った学校の時数というものを現場で合意して定めていって、その枠内で内容を定めていく、そういう流れが良いのではないかと思っています。